

心理臨床における粘土表現の体験的基礎としての 「粘土性」の検討

河 本 智

〔抄 録〕

本稿は、中井（1973）の述べる“粘土性”が心理臨床において粘土表現が治療的に機能する基礎にあるのではないかと考え、人が粘土に触れるとき、どのような体験をし、どのような心理過程が起きるのか、粘土表現の体験的基礎となる“粘土性”そのものの体験を明らかにすることを目的とした。調査協力者の語りを質的に分析し、比較検討した結果、時間の経過と協力者の働きかけによって、粘土の温度、硬さ、触感に変化が生じていた。この“粘土性”が時間の経過と協力者の働きかけによって生じることで守りの枠となることがみられ、守られた枠の中で、自身の体温が粘土から返ってくるような体験を経て、粘土を“人”のように感じ取る体験がみられた。さらには、他者に包み込まれるような感覚や粘土が自身の一部に感じるような体験がみられ、“自己であり他者でもある”存在と出会う心理過程が生じている可能性が示唆された。

キーワード：粘土性、粘土に触れる、質的分析

第1章 序論

第1節 粘土について

ガストン・バシュラール（1972）は「想像力にとっては、可塑的な作業のため十分長い期間をかけた方がよいと思われる。捏粉をたっぷり時間をかけて捏ねた人は、良好な可塑的素質をうる多くの機会にめぐまれる」と物質の可塑性について言及し、「母なる大地の物質的力を信頼した服従である。大地の偉大な夢想家はすべてこのように大地を愛し、粘土を存在の素材として崇拝する」と粘土のもつ母なる大地としての性質について触れている。そして、「軟らかい大地こそ、物質の想像力の急所であると認めざるをえないのである。軟らかい大地と交渉をもつひとは、内密の経験、抑圧された夢想に引き戻される」と粘土のもつ“引き戻す”力について触れている。

また、中井（1973）は「粘土がロールシャッハやなぐり描き法よりもはるかに安全な方法であるのは、おそらくその大地親近性によるものであろう」、「バシュラールによれば粘土は

攻撃性を制作に転導する変換器の役割を果たすものである」、「粘土の扱い難い塊体はその重量と円み、易変形性と細部彫琢不可能性によって自由連想をおのずと制限し、その危険な飛翔を絶えず大地に引き戻している」と粘土の持つ性質について言及している。これらについてさらに、中井（1976）は「粘土細工は独特の位置にあって、投影的でもあり（粘土塊のある形が存在するからその印象が手がかりとなり得る）、構成的でもありうるし（粘土は可塑的だから）、さらに重量感、触感、温（冷）感が加わってくる。あまりに細部を彫刻できないという不如意性も加わって、粘土には全体として“粘土性”としか言いようのない持味がある」と述べている。粘土のもつ、この“粘土性”が、心理臨床において粘土表現が治療的に機能する基礎にあるのではないかと考えられる。

第2節 心理臨床・心理療法における粘土について

今日、心理臨床において粘土は芸術療法やプレイセラピーの一場面において用いられている。例えば、中井（1973）が統合失調症患者に対して用いており、「粘土は空間分割彩色法とともにもっとも早期から連続的にも挿間的にも実施できる」、「一般に重点は臨界期あるいはその直後にあるが逡巡期にも挿間的使用によって“時々大地にひきもどす”ことは意義があろう」としている。他には、千葉（1982）が粘土による陶芸を含む、芸術療法・造型療法を病院において導入した際の手引きについて述べている。また、小野（2005）は粘土を視覚的な表現様式として述べている。高橋（2010）は造形における内的体験について明らかにすることを目的とした個別粘土制作を通じた研究において「手を介した多様な表現を受け入れる粘土に対して制作者がどのように“造型のあり方”を選択するかは、制作者が表現した世界とどのようにかわるかと密接に関係していると考えられる」と述べている。さらに、徳田（1998）は「粘土療法や陶芸療法などでは、土を素材として作り上げる過程を一連の統合的な身体活動、特に手を通じた行動、さらに感覚・感情を統合した働きを療法の機能そのものとして捉えるのである」としている。これらのことから、粘土が製作者の身体感覚や内的世界に働きかける素材として芸術療法や造形作品に用いられていることが言えるだろう。

第3節 粘土に関する研究について

粘土の研究については、平井（2010）が「どのように粘土を扱うか、（中略）そこには、作り手の他者や外の世界との関係の取り方、あり方が表現されているのではないだろうか」と考え、粘土製作における触れる体験に迫ることを目的としたものがある。また、山脇（2012）の粘土表現活動が教師の主観的気分及ぼす影響について検討した研究や、山脇（2013）の粘土による表現活動の心理的効果についての研究、高橋（2010）の青年期における粘土制作を通じて、造形のあり方を選択させることによって主観的意味づけを明確化し、造形における内的体験について明らかにすることを目的とした研究や、島田（2011）の幼児を対象とした粘土造形についての研究があげられる。しかし、これらの先行研究は粘土での表現や造形

での体験に着目しているものであり、粘土を捏ねることに留まる体験について研究しているものではない。

第4節 触覚・触れることについて

小柳（1978）は触覚について「皮膚感覚だけではなく、視覚や聴覚、味覚、運動感覚などほかの感覚も多かれ少なかれ関与しているものも含まれている」と述べている。つまり触感の一つの感覚器から受け取った情報のみでなく、複数の情報を受け取り、処理していると言える。この触覚によって私達は人や物から身体に伝わる体温や感触を受け取ることができる。そして、この体温や感触を感じることで平井（2010）は「相手の存在を知り、他者の存在を確かめるようになる。他者に触れることは同時に自分が触れられることであり、触れられることによって、自らの存在を知り、確かめていく」と述べており、「私」という存在を触覚によって確かめていると言える。例えば、乳幼児に対する養育者の接触が欠けると成長するにつれて人との協調性の欠如、孤独傾向、さらには情緒不安定を引き起こすと言われており、養育者の肌に触れて、そのぬくもりを感じるによって不安や恐れ、緊張をときほぐし、安定を保つのである。養育者との接触、つまり皮膚から得られる情報により乳幼児は心の安定、そして自分と他者の存在を現実的に感じ取る。

また、ディディエ・アンジュー（1985）は皮膚の機能として「皮膚と皮膚に含まれる触覚器官は外部世界に関する直接的な情報を供給する」ことをあげ、「他人とのコミュニケーションや意味ある関係を樹立するための基本的な手段であり、場所」とであると述べている。これからは、皮膚の機能としての触覚により、言語や身体接触を含む、人とのコミュニケーションは成立しうると言えるだろう。また、平井（2010）は「触覚は五感のうちでただ一つ、自らを省みる内省的な構造をもっている」とし、「触っていると触られているとの両感覚を同時に体験している」と述べている。このことから、他者とのコミュニケーションだけでなく、内省を行うことで自己との一種のコミュニケーションも可能と言えるのではないだろうか。

第5節 触覚を用いる他技法 - 箱庭療法における砂について

粘土の原理を述べるのに心理療法で同じように触覚を持ち合わせたものに箱庭療法があげられる。河合（1969）は箱庭療法での「砂に触れることは治療に必要な適度な退行を起こすのに役立つ」としている。山口（1997）は「箱庭療法の治療的要因の一つである砂は手で触れて自由に形を変化させることができ、その感触によって制作者はリラックスして心の内にあるものを表現しやすくなる」と述べている。これから箱庭の砂は、触覚を通して感覚機能に働きかける役割を持っている。吉水（2007）は砂のみの箱庭表現について研究し、「現物としての砂とのかかわりから、作り手が心のフォーカスを内向させつつ砂と交互作用を経る中で、次第に箱庭は抽象的な自己表象となっていくものである」と砂に触れることで起こる内的感覚について述べており、また「砂に触れているうちに砂の形状から反作用を受けてイ

メージが作り手の中に生じ、それを受けて作り手はまた砂へいかなる作用を及ぼすかを決定して砂にかかわり、造形を行っていく」という作り手の砂に触る体験についても触れている。そして中道（2010）は箱庭における砂について「砂に触ることで感触が生に体験でき、心からのアプローチと同時に身体からのアプローチが行われ、心身両側面からの働きかけが可能となる」と述べている。

第6節 本研究の目的

第5節にて述べたように、砂の持つ性質、いわば砂の“砂性”についての研究は行われていると言える。しかし、第3節ですでに述べたように、粘土についての研究は粘土表現に着目するものがほとんどであり、粘土に触れている体験のみに着目し、粘土の“粘土性”（中井, 1976）について研究しているものは見当たらなかった。以上のことから、本研究の目的は粘土によって表現された作品の分析ではなく、人が粘土という素材に触れるとき、どのような体験をし、どのような心理過程が起きるのか、粘土表現の体験的基礎となる“粘土性”そのものの体験を明らかにすることである。“粘土性”の体験を明らかにすることは、粘土が粘土であるが故に引き起こす体験を明らかにすることである。粘土によって引き起こされる体験が明らかになることで、心理臨床の実践において、どのようなクライアントに、どのようなタイミングで粘土を用いれば良いのかを判断するための基礎的な知見を得ることができると期待される。

2章 方法

大学生を対象として、粘土を捏ねてもらいながら、その際の感覚について語ってもらう形で調査を行った。なお、調査は半構造化面接形式にて行った。

第1節 調査協力者

佛教大学で行われている各講義の担当教員に対し、調査協力者を募る用紙の配布許可を事前に取り、講義内に受講生に対して配布した。そこから協力が得られた学生を調査協力者とし、調査を行った。調査協力者は9名（男性5名、女性4名）、年齢は19歳～22歳であった。

第2節 調査日時、場所

本調査は、2014年10月28日～11月6日の間で行った。佛教大学14号館の面接室2、3、5において、面接調査を行った。調査時間は全体で約35分～1時間程度であった。

第3節 調査材料及び、調査装置

粘土は、クツワ株式会社の油粘土500gを用意し、各協力者に適宜切り分けてもらい、使用した。粘土板は縦25cm、横31.5cmであった。粘土を切り分ける際は、新日本造形株式

会社のねんどへらセット内の竹製彫塑へらを使用した。様子は Victor JVC GZ-HD320 にてビデオ撮影を行った。また、OLYMPUS IMAGING CORP V-802 にて音声データの録音も行った。

第4節 調査手続き

個別に調査を実施した。調査依頼時に文書と口頭で調査内容及び、研究倫理上の配慮について説明し、同意を得た。

①調査協力者にまず、粘土を両手から少しはみ出る大きさに切り分けてもらった。

なお、使用する粘土の大きさは「両手から少しはみ出る大きさ」に切り分けてください」と教示した。これは、造形することが目的でないため粘土の質量は多くなくてもよいという点、粘土が小さいと握る作業のみになってしまう可能性が高まるのではないかという点、大きいと捏ねることが困難になる可能性が高まるのではないかという点と、調査協力者の粘土を捏ね続けることによる身体的・心理的負担を考慮し、両手で捏ねるための最低限必要な大きさとして「両手から少しはみ出る大きさ」とした。②今から粘土を捏ね続けてもらうこと、③捏ねながら何かを作りたいと考えるのはかまわないが、作らないで捏ね続けて欲しいということ、④調査協力者が捏ね続けている際に調査者が i) どのような感覚か、ii) どのような気持ちか、iii) 作りたくなった物があればそれは何か、iv) 何か思い出したことはあるか、という質問を尋ねること、⑤調査者の質問に粘土を捏ねながら答えて欲しいということを教示した。

第5節 分析方法

調査にて録音した音声を逐語におこし、逐語からそれぞれの調査協力者の語りの特徴を探した。その中で、各調査協力者は粘土の状態がどのように変化していると体験しているのか、また、粘土を捏ねることによってどのような感覚の変化を体験しているのかを語りの特徴から検討した。ある調査協力者の語りからある特徴がみられた際に、そのような特徴が他の調査協力者においてもみられるものであるのかどうかを比較検討した。その結果から、他の調査協力者と共通の特徴が多くみられる1人の調査協力者（調査協力者 H）を選定し、調査協力者 H の体験を時系列に沿って記述し、他の調査協力者の体験と比較検討を行った。なお、各協力者の逐語録について、ひとまとまりの語りであると考えられる発言ごとに、「協力者のアルファベット - 番号」という形で識別記号をつけた。例えば、協力者 A の語りのうち、まとまりのある一つ目の発言に A-1 とつけるなどである。

第6節 倫理的配慮

本調査では文書と口頭で、研究の目的・方法、個人情報やデータ等の取り扱い方法、研究成果の発表方法について説明を行った。また、調査中に身体的もしくは精神的な苦痛を感じた場合は調査を中止が可能であること、その場合に調査協力者が不利益を被ることはないことを説明した。

第3章 結果と考察

先述のようにある調査協力者の語りからある特徴がみられた際に、そのような特徴が他の調査協力者においてもみられるものであるのかどうかを比較検討した。その結果、他の調査協力者と共通の特徴が多くみられた調査協力者 H の体験を時系列に沿って語りから読み取れる体験を順に説明し、結果と考察を述べる。

第1節 重たさへの言及 - 触り始めの重たさ・実感

H は初めに油粘土を触ると「油粘土は重たいなって思います」と語った（H-2 引用）。続けて H は「重たさは、実際に手に持ってるなって感じが」（H-2-1）と話した。このことから H は捏ね初めに、油粘土の重たさを感じていることが窺え、その結果として実際に手に粘土を持っている感覚を体験していると考えられる。C,D,G も H 同様重たさについて言及していた（C-6,D-10,G-4）。例えば D は同様に重さを感じることで「握っている実感でいうのが湧きやすい」（D-12）、G は「ずっしりときた」（G-7）と語っている。H が捏ね始めてすぐに粘土の重たさについて言及している点や C,D,G も捏ね始めて少しすると同様に言及していた点から、協力者は捏ね始めの粘土の“重たさ”を際立って体験をしていたのではないかと推察される。また、これらから粘土を捏ねる際に“重たさ”が最初に体験されていることが示唆される。

第2節 硬さへの言及 - 捏ね初めの硬さ・捏ねにくさ・疲れる

H は粘土を捏ね始めた際、「硬いのかなって思いましたね」（H-8）、「捏ね初めの感じが硬いなっ」と（H-10）、「気持ち的に・・・んー握力使うんで硬いのよりは軟らかいのが良いなっ」と（H-11）と話した。また、硬い粘土を捏ねるのは身体的に「ちょっと疲れます」（H-12）と語っていた。他の協力者も「捏ねにくい」（A-5）、「形が簡単に変えられない」（B-13）、「疲れるような」（C-12）、「思い通りにいかない」（D-2）、「結構やってたら疲れてきそうな」（E-11）、「手がしんどい」（F-8）「手がしんどいとちょっと身体も力んじゃう」（F-9）、「握力も結構、力いるんで」（G-9）、と H 同様、硬さと硬いことによる捏ねにくさ、身体的に疲れることについて捏ね始めに言及していた。このことから捏ね初めの粘土の硬さは、身体が力むほど、また身体的な疲労感が強く感じられるほどに、全身を使って粘土に挑まざるを得ないものとして体験されていることが推察される。この捏ね初めにおいて粘土の硬さは、際立って体験されていると言えそうである。

第3節 多少の軟らかさへの言及 - 最初より軟らかくなる・落ち着く

硬いと感じられた粘土を捏ね続けていくと H は「ちょっと最初よりは軟らかい感じがします」（H-13）と話すようになった。その後「最初はだいぶ冷たかったんですけど、少し温

かくなってきて軟らかいんで最初よりかは気持ちいい感じです」(H-14)と語った。このことからHは粘土が少し温かくなり、軟らかくなったことで気持ちよさを感じている様子が窺える。また、粘土が軟らかくなったことについてA,B,C,D,E,F,Iも捏ね始めてしばらくすると言及していた。さらに「落ち着く感じがちょっとしますね」(B-20)、「落ち着くというか何か楽しいというか」(C-26)、「気持ち的にはさっきより落ち着いてるかなと思います」(D-16)、「あまりこう力ぎゅって入れてる感じはないかな」(E-28)、「ちょっと楽ですね」(F-15)、「ちょっと満足感」(I-12)と述べていた。このことから、粘土が温かくなり、少し軟らかくなったことで、全身から力みが取れて、第2節で取り上げた“捏ね初めの粘土の硬さによる身体が力むほどの身体的な疲労感”から落ち着きを取り戻したことが推察される。ここでは捏ねれば軟らかく変化するという粘土の特性が際立って体験されていると言えそうである。

第4節 温度の変化への言及 - だんだん温かくなる

多少軟らかくなってきた粘土を捏ねているとHは「だんだんだんだん温まってくるんで自分があつためてるなって思います」(H-16)、「だんだん自分が温めて自分の一部に近づいてるのかなって感じが」(H-17)と語っている。このことからHが捏ねることで粘土の温度が変化し、H自身が粘土を温めていることを実感していることが推察される。その実感により、Hは粘土が自分の一部のように感じられ始めたと考えられる。また、粘土が徐々に温かくなることであたかも協力者自身の体温へと粘土が近づくような変化をHが感じていたのではないかと考えられる。粘土の温度の変化については捏ね始めてしばらくすると「手のぬくもりからもちょっとずつその温かくなってきて」(D-31)、「温かい気が・・・しま・・・して」(F-52)、「ちょっとなんか温かくなってきたり」(I-29)と他の協力者も言及していた。これらのことから、協力者は粘土を捏ねれば徐々に温かくなる体験をしていることが窺え、捏ねることで協力者の体温が移り、温かくなるという粘土の特性が際立って体験されていると言える。

第5節 粘土の温かさへの言及 - ほっこりする・安心感

温かくなった粘土についてHは「落ち着き」(H-27)を感じると話していた。H同様に他の協力者も、温かさについての言及の後に「手のぬくもりからちょっとずつその温かくなってきて、まあそういう所から、温かみとか軟らかさから距離が近いのかなって」(D-31)、「落ち着く」(E-46)、「なんか安心するかな」(F-54)、「凄いフィット感があります」(I-30)と言及していた。これらのことから、冷たい粘土が協力者自身の体温によって温かくなり、粘土との心理的な距離感が変化しているような体験をしていることが推察される。この体験によって協力者に落ち着きや安心感などの温かい気持ちが生じているのだと考えられる。

粘土の温かさに関してHは「やっぱり落ち着く感じですかね」(H-31)、「だんだん自分に近い温度になってきて自分が客観視できるような」(H-32)、「(自分を)冷静に見ていられる感じ」(H-33)と語っていた。これらから、Hの体温によって粘土が温められたからこそ、

安心感を得ていることが窺え、それに加えて粘土が自身の体温に近い温度へと変化することで粘土を分身のように感じ、あたかも自身を客観的に見ているような体験をしていると考えられる。

温かさについて他の協力者は「安心感あります」（D-32）、「多分慣れてる温度じゃないですけどそんな感じやから結構ほっとする」（E-52）、「自分の触ったことに対して温かくなったんでなんか直接的に自分のものって感じれます。逆に自分の分身みたいな」（I-33）と語っていた。このことから、粘土が体温に近い温度になった点、協力者自身が粘土を温めた点の2点から、粘土が自分の分身や一部として感じられるようになるのだと考えられる。

自分の体温に近いことについてHは「味方になってくれると思います」（H-34）、「なんか1人じゃないんかなっていう感じになります」（H-35）、「安心感があります」（H-36）と語っている。これらからH自身にとって粘土が体温に近い点、そして自分の一部のように感じている点から粘土に自身の共通点を感じ、傍にいてくれる味方のような存在に感じていると考えられる。また粘土が安心感を与えてくれる“味方”のような心強い存在として語られていることから、Hにとって粘土が孤独を感じさせない心強い“味方”にも感じられたのではないかと推察される。

また、他の協力者は「温かくて柔軟でって思うと何か親しみというか距離が近いようなそんな気がします」（B-103）、「受け入れられているっぽくて好ましいですね」（C-129）、「穏やかな感じ」（F-61）、「ずっしりきます。なんかここにあるんやって！みたいな感じ」（I-37）と体温に近くなったことでの心理的な変化についてそれぞれ言及している。Bは粘土が体温によって温かく、軟らかくなったことで粘土との距離が近づいたような体験をしていることが窺える。Cは粘土が体温で温まったことで粘土に自身の体温を受け入れられたような体験をし、その結果、C自身のことをあたかも受け入れられているように感じているのではないかと考えられる。また、FはH同様、自分の体温に近い粘土を捏ねることで“穏やかな”気持ちになったのではないかと考えられる。そしてIは体温によって温かく柔軟になった粘土について“ずっしり”とくる重さを感じており、温度によって粘土の存在を感じ取っていることが窺える。これらのことから、粘土から体温のような温かさを感じた結果、協力者は粘土との距離感が変化したように感じ、それに伴って協力者自身の心理状態も変化する体験をしていたことが示唆される。

第6節 過去の想起 - 粘土に纏わる思い出・懐かしい

油粘土を捏ねていて思い出したことについてHは「なんか匂いも幼稚園の時にしてた粘土と一緒にだまって」（H-47）、「懐かしい感覚が」（H-48）あると話していた。幼少期について思い出していることは「粘土に纏わることを思い出しますね」（H-49）、「粘土以外に思い出すことは誰と一緒に遊んでたとか」（H-50）と語っている。また、協力者全員が粘土で遊んでいた記憶について言及している。これからは、油粘土の匂いが昔の体験や記憶を思い

出す刺激になっていることが考えられる。粘土を捏ねながら想起したことについてHは「無心に捏ねてたらふと粘土の匂いがして、粘土の匂い嗅ぐと粘土が身近にあった幼稚園の時の記憶がどどこ（と思い出される）」(H-52)と言及している。粘土を捏ねながら想起したことについて、A,B,D,E,G,Iからも幼少期や幼少期以降の過去の体験を想起している語りがみられた。このことから、粘土を中心に記憶を遡り、連想するようにして思い出し、当時の記憶を再び体験している可能性が示唆される。また、粘土の温かさによって友達の存在、人の存在を感じながら思い出している可能性も推察される。さらに、協力者は意識的に過去を思い出すのではなく、粘土から受ける刺激を視覚、触覚、嗅覚が受け取り、思わず思い出しているのではないかと考えられる。そして、思い出している中で過去の体験を現実で再体験しつつ、触覚による刺激を粘土から受け取ることによって協力者はつぎつぎと過去の体験をかきたてられるように連想的に想起する体験をしていたのではないかと考えられる。その結果、粘土で遊んでいた際の記憶だけでなく、当時遊んでいた友人を含む幼少期の体験を連想的に想起したのではないかと推察される。

第7節 粘土の軟らかさについての言及 - 気持ちいい・親しみ

Hは捏ね続けた結果、粘土が軟らかくなったことについて「あまり力入れなくてもスルっていくのが気持ちいいですね」(H-54)と語っている。これは、あまり力を入れずに捏ねられる油粘土の感触に気持ち良さを感じている様子がみられ、感触として滑らかさを楽しんでいると考えられる。他の協力者は「なんか自分の思い通りの形にできやすいんで何か好きですね。軟らかいの」(A-109)、「軟らかくなったりとかなんか作りたい物ができたりとかっていうのが、なんか自分の物っぽくなっていったかな」(E-84)、「多分凄く自由に動ける状態」(G-108)、「粘土自体が軟らかくなってきたから、なんかこう無駄な力入れなくてもこうなって・・・こうしたってゆうようにすぐにふって動いてくれる」(I-31)と軟らかさについて言及している。これらからまず、粘土が軟らかくなり、協力者は思い通りに粘土を自由に動かせる状態になったことが窺える。また、他の協力者は軟らかさについて「関係性が凄く・・・何でしょう・・・軟らかくなってきたというか。そうですね・・・親しみが凄く・・・できた」(B-89)、「軟らかくなって欲しいなって言うのを分かってくれたみたい」(C-52)、「なんか気持が伝わってる感じはする」(D-69)、「なんかちょっと仲良くなれたかなあみたい」(F-64)、とも言及している。これらからは、粘土を捏ね続けたことで軟らかくなった結果、捏ね始めから粘土に対して協力者が働きかけたことに対する粘土からの反応を感じ取る体験をしていたのではないかと考えられる。そしてこの体験によって、粘土との関係が軟化または良好な関係へと変化したような体験をしているのではないかと考えられる。

第8節 粘土から人肌を感じることに言及 - 手を繋いでいる

自由に粘土を捏ねることができるほどになると、Hは温かさについて「人肌がいいんです

かね」(H-61)、「粘土から返ってくる感じ」(H-62)、「握ってたらなんか誰かと手を繋いでる」(H-63)と語っている。これから、Hは粘土から人肌のような温かさを感じ、人肌のような温かさだからこそ心地よさを感じていると推察される。これは人肌のような温かさによってあたかも他者の存在を感じ、また、他者の存在を通じて自分自身の存在を感じていることが考えられ、Hが伝えた温度によって温まった粘土が再びHに温度を伝え返しているようにHには感じられているのではないかと考えられる。温かさについて他の協力者は「ちょっとほっとするような・・・」(B-109)、「なんか繋がってるじゃないですけど」(D-43)、「やっぱり一人じゃない気持ち、安心感とかにも繋がる」(D-44)、「ずっしりきます。なんかここにあるんや！みたいな感じ」(I-37)と語っている。これらから、粘土が人肌のように温かくなり、協力者自身の体温が粘土から返ってくるという体験によって、実際に他者と手を繋いだ際に自分の体温と他者の体温とを同時に感じ取るような体験をしているのではないかと考えられ、そのため“手を繋いでいる”ような感覚や他者の存在を感じることによる安心感となったのではないかと推察される。

Hは温かくなったことでの変化について「ちょっと力が要って冷たいし、触りたくないなって感じからだんだん触ってたいなって気持ちに変わってきて」(H-65)と話している。他の協力者は「結構手触りが良くてずっとやっていくようになりますね」(A-184)、「最初に比べると楽しくなってきたような・・・(中略)・・・捏ねれば捏ねる程楽しいような、凄く気持ちが前向きというかほっこりするようなそんな気が少ししますかね」(B-115)と語っていた。これは粘土が温かくなり、捏ねる気持ち良さを感じたことで触っていたいという気持ちが生じたことが窺える。

第9節 粘土がさらに温かくなったことへの言及 - 自分の物のよう・距離感が縮まる

さらに温かくなった粘土についてHは「最初と比べて粘土への距離感は縮まったかなと」(H-77)と言及している。他の協力者も粘土に対して「距離が縮まったような感じ？何かそんな感じですね」(B-90)、「粘土は無機物ですけど距離が近くなった感じがします」(D-30)と語っている。これは第5節で述べた協力者と粘土の距離感が、さらに捏ねることでより変化し、その結果、第5節で取り上げた“落ち着き”や“安心感”を協力者がより強く感じていることが窺える。また、C.E.Fは“距離感”という表現ではないが「ちゃんと対話やってたらその素のその良い子の部分出してくれて、分かり合えたみたいな感じですね」(C-74)、「こっちの方がとつきやすいかなって」(E-61)、「なんか軟らかいし、なんかちょっと仲良くなれたかなーみたいな」(F-64)と温かくなった粘土について語っている。このことから捏ねることで粘土との心理的な距離感に変化が生じていることは窺える。さらに、粘土との距離感が近づくことへの不快感を示す語りが全協力者から見られなかったことから、粘土との距離感が縮まる体験は快に近いものであったことが考えられる。

その後、Hは自分と同じ温かさについては「お守りみたいな感覚ですかね」(H-80)、「安

心感の面ですかね」(H-81)、安心感については「最初は別になかったんですけど温かくなってきたらなんか守られる感じが」(H-83)と述べ、「今のよう考えた時に見てると落ち着く感じですかね」(H-84)と語った。これらから、Hは温かさによって粘土から安心感を得ており、その安心感がお守りみたいな感覚として語られていると推察される。他の協力者も温かさについて、「安心感にも繋がる」(D-44)、「落ち着くっていうかなんていうんやろか、そういう感じがなと」(E-46)、「安心するかな」(F-54)、「冷たいよりは何か気持ち的にも和らぐ感じが」(G-105)、「安心します」(I-62)と語っている。これらから、粘土の温かさによってどこか包まれている、守られている感覚を協力者は体験し、その結果、安心感をおぼえていると考えられる。つまり、粘土を捏ねることで粘土を温め、それと同時に協力者自身もその温度に包まれるという体験をしているのではないかと推察される。これは、温度によって生じる安心感については赤ん坊以来の養育者とのスキンシップによって包まれる体験と類似しているのではないかと考えられ、そのため温かい粘土を両手で包み込むように捏ねることで安心感を得ることができるとも考えられる。これらのことから、協力者の体温によって人肌まで温まることが可能で、かつその人肌のような温度で協力者を心理的に包み込むだけでなく、実際に触覚においても包み込まれるような程よい粘着質をもつ粘土の特性が際立って体験されていると推察される。

第10節 粘土の形を変えることへの言及 - 思い通りと、もどかしさ

捏ね続けているとHは「色んな形になって最終的な形を決めるのは自分みたいな感じですかね」(H-85)、しかしその反面、「なかなか形が決まらないのはもどかしい感じがあります」(H-86)と話していた。他の協力者は「自分で形を変えられるって言うのは凄く楽しいこと」(B-77)、「ほんと言うこと聞いてくれる感じで」(C-70)、「伝わってるって言うか思い通りに行くようになったって感じ」(D-68)、「なんか自分の物だから好きにできるって言うか」(E-78)と語っていた。ここから、粘土が軟らかくなり、協力者の思い通りに捏ねることが可能になった様子がみられ、その結果粘土を好きなように扱える物として捉えていることが推察される。また、粘土を捏ね続けたことで意のままに粘土を変形させることが可能であると感じ、それによって粘土を支配したような感覚になっていることが考えられる。しかし、今まで意のままに操ることが困難であった粘土が意のままに操ることが可能になったことで、何を作りたいか思い浮かばない戸惑いやイメージが決まらないもどかしさも同時に感じているのではないかと考えられる。

第11節 粘土の状態についての振り返りの際での言及 - 手応えと達成感

粘土の変化についての振り返りでHは「冷たい硬いから、中間になって温かい軟らかい」(H-92)と述べ、「中間」に関しては「ぬるいと硬すぎないけど柔らかくない感じ」(H-93)と付け加えるように話していた。他の協力者全員も粘土の変化について同様に冷たい→温か

い、硬い→軟らかいという変化があったことについて言及していた。粘土が冷たくて硬い際には、「硬いし揉むのがちょっとしんどいなって思いつつ。」(H-94)、「中間になったらもうちょっと揉み続けようか」(H-95)、「温かくなってきたし、軟らかくなってきたしこのまま練ってれば温かくて軟らかいものになるだろうっていう兆しが」(H-96) 感じられたと語っており、その際「強いて言うなら『お！軟らかくなってきたぞ』っていう感覚が」(H-98) あったと語っている。他の協力者は「向こう（粘土）もちょっと・・気持ち軟化させてくれて、まあちょっとドア開けてやってもいいかなみたいな・・・なってくれたんかなーと」(B-82)、「最初冷たかった物が自分の手の温もりも伝わって徐々に捏ねていくことで軟らかくなって、でもまあ自分の体温とかも伝わっているのを実感できて、でも軟らかくもなっていたんで、凄い捏ねてて良かったて言うことともう少し捏ねようと言う気持ちがあって」(D-75)、「目標って変ですけど、しょぼい目標ですけど何かどんどんその自分の決めたことに近づいているんかなって思いながら」(G-61)と語っていた。これは協力者が粘土を捏ね続けている中で、粘土が軟らかく・温かく変化したことを感じ取っている様子が窺え、粘土の変化に対する手応えを感じていることが考えられる。これらから、当初は粘土の硬さに対して捏ねるしんどさを感じていたと考えられ、さらに捏ねる際の冷たさも不快であったと推察される。また、この手応えによって、捏ねることに抵抗を感じていた協力者は粘土が温かくて軟らかいものに変化するという予測を触覚によって感じ取っていることが考えられる。

その後Hは「温かくなってきてからはなんか・・うーん・・なんか安心感みたいな。自分と・・ここまで育てたぞみたいな感覚」(H-99)、「温かくした点に関しては達成感が」(H-100)と語っていた。他の協力者は「自分が無性にやっててなんかこう最終的にこうなったていうのを見ると凄い気持ちいいです」(A-194)、「ちょっとした達成感」(B-47)、「やっと成果が出てきてまあ達成感とか喜びとか」(D-29)と話していた。これらから粘土を温かく軟らかい状態まで育てたことへの達成感が窺える。こうした達成感は温度や触感の変化によって協力者自身がこれまで行ってきた作業の軌跡を感じるによって生じてきたのだと考えられる。また、Hはまっさらな状態から自らがあたかも“育てた”かのように感じる体験をしている点から冷たく硬かったものに温かさを与え、動きを生み出し、生命を育てるような体験をしているのではないかと考えられる。

Hは安心感に関しては温度だけでなく、「なんか四角いのはかっこいいけど丸は優しいみたいな？そんな感覚で・・そっからくるのに似てるのかな？」(H-103)と語っていた。ここからHは粘土を捏ねている際の角がない丸みや軟らかさからも安心感を得ていると考えられる。同様に他の協力者も「球体でこう滑らかな部分もあるし、角がない分なんやろ？優しい感じがするんかなって」(E-56)、「手触りがちょっと丸くなってきたんで（安心感を得るところは）そこですかね」(F-52)、「なんか安心するかな」(F-54)と話していた。これらから、粘土は協力者が安心感を得る・安心感を得るような優しさを受けるような手触りであることが考えられる。

第12節 感覚的な体験についての振り返りへの言及 - 捏ねたい

Hは捏ね初めは「なんか硬いとしんどいのと冷たいのとそれ位ですかね」(H-109)と振り返っていた。また同様に、H以外では身体的な疲労感についてはA,C,D,E,F,G,Iが、心理的な疲労感についてはC,D,E,Fも言及していた。これは、捏ね初めは粘土が硬くてしんどく、さらに冷たかったので触ることへのためらいがあり、嫌であったことが推察される。

その後の変化について「捏ねなきゃっていう義務感から捏ねたいっていう感じになった…気があって」(H-110)と語っていた。これは粘土が軟らかくなっていくことで、硬くてどうしようもない粘土を捏ねなければならないという義務感からHが解放される体験をしているのではないかと考えられる。また、捏ねたい気持ちが生じる要因としてHは「粘土で遊んだ記憶とかが蘇るからですかね」(H-111)と語り、「ちょっと楽しい気分」(H-112)なると話していた。また、Fは「懐かしい感じですかね？楽しい感じですかね」(F-21)と語っている。このことからF,Hは粘土を捏ねていると“楽しい”と感じる体験をしていることが窺える。楽しいという語りはみられなかったが、捏ねながら思い出していることについてG,Iは「なんかこう優しく触りながらこう…捏ねたりする感じがするのかなって思います」(G-143)「小さい頃見たその映像がばって出てくるみたいな感じで、そのまま自分が映像に入ってるんじゃないくて、自分が見たまんまがでてきます」(I-54)と語っている。G,Iは過去の体験をなぞるように現在、体験をしているのではないかと考えられる。粘土で遊んだ記憶が蘇るという言葉からは粘土で遊んだ際の記憶を再体験することで、再び当時の様に体験していることが考えられる。また、粘土を捏ねながら過去の体験を想起・再体験し、その一方で当時では感じ取ることのできなかった心理的な感覚を付け加えるようにして新しく体験しているのではないかと推察される。つまり、過去と現在という2つの時制での感覚を並行して味わっていたのではないかと考えられる。

第13節 粘土を両手で捏ねることへの言及 - 包み込む・手放したくない

両手で粘土を捏ねることについてHは「両手だと包み込む感じがあって」(H-116)、「片手より自在にできていい」(H-117)、「気持ちだと安心ですね」(H-118)と話し、そして、「もうちょっと捏ねてたい、手放したくない」(H-119)と語っている。両手で捏ねることについて他の協力者は「結構落ち着くと言うか…楽しい」(C-40)、「(ちゃんと手に持っている)安心感があるんですかね」(F-123)と言及している。このことから粘土を両手で包みこむようにして掌の中に収めることで安心や落ち着きを感じていると考えられる。温かい存在を両手で包み込むことによって、心理的には包み込まれていることが考えられ、その結果落ち着くという体験をしているのではないかと考えられる。

温かくて軟らかくなってきた粘土に対して「ちょっと手放すのは寂しい。(中略)友達と別れるが寂しいような感じですかね」(H-121)、「今は粘土自体からも親しみみたい」(H-123)と語っていた。他の協力者は「何か親しみというか距離が近いようなそんな気がします」

(B-103)、「親しみと言うか、愛着が湧いてくる感じで、今ちょっと離れがたいですね」(C-154)、「ちょっと可愛くなってきました」(I-26)と言及している。これは粘土から人肌のような温かさや触感を感じたことで、粘土を友人や距離の近い、親しみを感じる存在として擬人化して話していると考えられる。粘土を捏ねることによってあたかもお互いが温度を伝え合うような体験を共有してきたことが推察される。つまり、粘土を手放すことを考えると共に歩んできた変化を振り返り、別れる寂しさを感じていたのではないかと考えられる。さらに、捏ね初めは“初対面”であった粘土が、時間の経過と共に友達のように感じられ、親しみを粘土自体から感じる体験をしていたことが考えられる。それは、幼少期から知る友達であり、なおかつ“自分の一部”というように自分自身でもあるのではないかと考えられ、他者でもあり自己でもある存在として粘土を捉えているのではないかと推察される。つまり、粘土を捏ねることで他者でも自己でもあるような存在と出会い、向き合っ共々に時間を経てきたが、その後、親しみを感じるまでに成長した存在と別れがたい体験をしたと考えられる。

第14節 協力者の語りの共通性について

調査協力者Hの体験が他の協力者にどの程度みられたのかを表1に示した。Hのみではなく、他の協力者にも見られたことから、粘土性の体験としてある程度の一般性を持つのではないかと考えられる。

表1 協力者からみられた粘土の状態と心的過程についての語り

協力者からみられた粘土の状態と心的過程についての語り									
粘土の状態	重たい	硬い	少し軟らかい	少し温かい	温かい	人肌に近い		軟らかい	粘土の状態
A	○	○	○					○	A
B		○	○		○			○	B
C	○	○	○	○		○		○	C
D	○	○	○	○	○	○		○	D
E		○	○		○	○		○	E
F		○	○	○	○			○	F
G	○	○			○			○	G
H	○	○	○	○	○	○		○	H
I	○	○	○	○	○	○		○	I
協力者の体験	重たさへの言及	捏ね辛さ	落ち着く・安心感	温かい気持ち	過去の想起	人のような存在との出会い	親しみ	達成感	協力者の体験
A	○				○			○	A
B		○	○	○	○	○	○	○	B
C	○	○		○	○	○	○		C
D	○	○	○		○			○	D
E		○	○	○			○		E
F	○	○	○		○		○		F
G	○	○	○	○	○	○			G
H	○	○	○	○	○	○	○	○	H
I	○	○	○	○	○	○	○		I

第4章 総合考察

第1節 粘土性の体験について

粘土について冷たい→温かい、硬い→軟らかいという状態の変化によって協力者の感覚が刺激を受け、内的体験をしていることについての言及や粘土の匂いによる懐かしさ、捏ねる粘土を実際に見ることについての言及があったことから協力者は粘土を視覚で捉え、触覚や

嗅覚によって存在を確かめていることが考えられる。このことから粘土は視覚、嗅覚、触覚を刺激する物体である。その中でも特に状態の変化により、その都度協力者の触覚を刺激し、前章で述べたような協力者に様々な変化を引き起こしていた。

第1項 重たさによる捏ねにくさと守り

捏ね始めの粘土特有の重さ、硬さについての言及から現実感を協力者は得ているのではないかと考えられる。これは平井(2010)が「触覚という身体感覚を通じて、感じられる粘土の抵抗、反発は作り手に、自分自身の身体の実在を感じさせる。」と述べていることから示唆される。また、粘土の重たさは中井(1973)の述べた「粘土の扱い難い塊体はその重量と円み、易変形性と細部彫琢不可能性によって自由連想をおのずと制限し、その危険な飛翔をたえず大地に引き戻している」と関係していることが考えられ、粘土の重みによって協力者は絶えず、現実感を感じ取っていることが推察される。また、粘土には協力者が言及していた“重たさ”による、不自由さが心理的・身体的な負担を与えるが、協力者の制限ともなると考えられる。この制限には捏ねにくさというネガティブな面と協力者を不用意な表現をしてしまうことから守りというポジティブな面を持ち合わせていることが推察される。これらからは、時間をかけて捏ねることで中井(1973)の述べる「易変形性」が生じてくることが言え、捏ね始めから「易変形性」が生じないことで守りとなるのではないと言えるだろう。

第2項 人肌のような粘土による“人”との出会い

その後、協力者はこの重さや硬さによって硬直した身体と心が、粘土が軟らかくなることでほぐれたことについて言及していた。これは平井(2010)が「重量感、自分が触れたときに手に返ってくる重さ、得体の知れないものに触れる驚き」と述べていることから得体の知れない存在から、粘土の存在が知れるものへと変化したことが考えられ、捏ねることによって粘土が協力者の知る存在へと変わっていったことが要因として考えられる。この緊張状態からの緩和によって協力者は心身共にほぐれた状態となり、自身の内的な変化を感じ取る余裕が生まれたことが窺える。粘土の温度について、人の存在を感じているような言及が協力者の語りからみられた。これは、捏ねることで粘土に体温が伝わり、その結果、粘土が人肌のように温かくなったことであたかも他者と触れ合い、包み込まれているような体験をしていることが考えられる。これは、他者と触れ合い、包み込まれているような体験によって安心感を覚え、同時に粘土に移った自身の体温を感じ取ることで自分の存在を確かめ、安心感を得ているのではないかと考えられる。これは平井(2010)の「他者に触れることは同時に自分が触られることであり、触れられることによって、自らの存在を知り、確かめていく」ことなのかもしれない。

第3項 軟らかさによる安心感・満足感

粘土を捏ねる際の不安や不快感について言及していることについて、軟らかくなる見通しがついたことで触感の気持ちよさを感じる余裕が生じ、捏ね続けることができたのではない

かと考えられる。これについて平井（2010）は「粘土の重量感や弾力に手で触れ、働きかけることから、粘土は形を変え、ときには作り手のコントロールを離れて思い通りにならないこともある」と述べている。このことから協力者が不安や不快感、作業の続行へ葛藤を抱えた体験をしていたのではないかと考えられる。また、葛藤を抱えた体験に対して、捏ね続けることで達成感を感じている語りがみられた。この達成感によって、粘土に働きかけてきた軌跡を成功体験とすることで、協力者は安心感や安堵、満足感を得ていると考えられる。

第4項 過去の想起による2つの時間軸での体験

協力者は粘土を捏ねていると過去を想起すると言及している。これは粘土を中心に過去を想起し、粘土の温度から友人などの存在を連想するようにして思い出していると語っている。この語りからは粘土での体験を中心にして過去の体験を想起し、現在再体験している様子がみられた。平井（2010）は「製作過程において、作り手は粘土に触れ、懐かしさとともに、かつての粘土遊びや過去の自分を振り返り、再会する。また、昔を振り返るとともに、今の自分の粘土へのかかわり方やその変化に気づく。過去の＜わたし＞に出会い、過去の＜わたし＞の感じている感触が同じであることに気づくことは、過去の＜わたし＞も現在の＜わたし＞も同じものであり、かつ、それはつながっているという自己の連続性を、身体で感じる体験であったと考えられる」と述べている。このことから粘土は過去と現実という2つの時間軸での体験を繋ぎ止める役割を行っていたと考えられ、この役割によって幼少期に体験できなかった課題を再体験することが可能となるのではないかと推察される。粘土を捏ねる過程で全協力者から語られた、過去を想起するという体験もまた粘土性の体験の重要な要素になっている可能性がある。

第5項 徐々に温かさを得ていく粘土による“人”と関わるような体験

粘土の温かさについてHは自らが“あたかも育てたような感覚”として言及しており、Hは単なる物質としての粘土ではなく、生命を持つかのように手をかけて育ててきたという体験をしているのではないかと考えられる。このことは平井（2010）が「時間を十分にかけ捏ねることで作り手から粘土に伝わった温度、温かさは「命」のように感じられ、「命」を持った、「生」を受けた作品が生まれる」と述べていることから言えるだろう。また、育てるという言葉は見られなかったが、他の協力者は粘土を人のように譬えている。中には粘土との関係を人との関係に譬えて語っている協力者もあり、これらのことから、あたかも生命をもった存在と接してきたような体験をしていることが考えられる。

また、Hは粘土を自分の一部と捉え、付き合いの長い友人のように言及していた。このことから、Hにとって粘土は幼少期から知る友達のような存在であり、さらに“自分の一部”というようにH自身でもあるのではないかと考えられ、他者でもあり自己でもある存在として粘土を捉えているのではないかと推察される。また、他の協力者からも粘土について、捏ね続けることであたかも友人や親しみを感じる存在へと変化したような体験が語りから見られた。

第6項 守られた枠の中での再体験と内省

以上のことから粘土は温度や触感の変化によって協力者を刺激する。その刺激によって自身の感覚に意識が向き始め、その結果、協力者は内省を促されるような体験をしていることが考えられる。この内省によって協力者は自己と出会い、また同時に他者とも出会う。この出会いにより、あたかも養育者に包まれるような体験をし、養育者との関係を再体験することが可能になるのではないだろうか。さらに、この再体験では自己であり他者である存在を手をかけて育てるような経験になる可能性がみられ、内省や再体験が行われるのではないかと考えられる。中井(1973)の述べる「大地に引き戻す感覚」、捏ね続けなければ生じない「易変形性」が協力者を守る枠となり、この枠内で協力者は内省や再体験をしていると考えられる。つまり、守りの中で協力者は自他が混在している存在と出会う体験過程を経ているのではないだろうか。また、その中で協力者は粘土の形を整えることで自身を整えているのかもしれない。

序論で箱庭療法の砂について、若干の特徴を述べたが、本研究の結果から砂と粘土を比較すると砂はさらさらで外からの刺激に対して敏感であり、流動性と可塑性が高い(中道2010)。それに対して、粘土は硬く、ずっしりとした重さがある。しかし、これは捏ねることで変化していく。つまり、時間の経過と人の働きかけによって、流動性と可塑性に変化が生じるということである。これは、協力者の体温による温度の変化、硬さの変化、そして表面の触感の変化であり、砂にはない様々な変化を持ち合わせているのではないだろうか。さらには島田(2011)が砂にはない粘着力について触れ、「砂でつくったお団子やトンネルは壊れやすいが、“粘着力”のある粘土ではある程度形を保持したまま造形(遊び)を展開することができる」と述べている。これらの点で砂とは異なる感覚が粘土では体験されると言えるだろう。これらのことから本章で述べた粘土のもつ“粘土性”がいかに体験されるかを示すことができたのではないか。

第2節 今後の課題

本調査では調査協力者が9名であったため、協力者の人数を増やしたうえでのさらなる検討が課題である。また、協力者Hを中心として検討したため、Hからは語られなかった体験については、扱うことができなかった。たとえば、「失敗もすぐ修正できるし」(B-120)、「なんかでもたまにこうやって何かミスって、ぐにゃってなったりして、あーもうって思いながらこうやってもどしていったりとか」(G-63)と言及していた、失敗が修正できる体験についての検討を行うことができなかった。この検討を行うには粘土のある程度まとまりを持ち、時間が経ったとしても形が変形可能な点に着目し、体験の検討を行うことが考えられる。また、「多少のイライラとかはでてきて、握りたくなる」(D-74)「ストレス発散じゃないですけど」(E-9)とイライラやストレスの対処についての言及も同様に検討が行えなかった。これは粘土の攻撃対象となりうる性質に着目し、体験の検討を行うことで推察が可能となるの

ではないかと考えられる。上述したように、Hの体験を中心としたことで検討ができなかった体験の検討が課題である。また、各調査協力者がどのような体験をしているのかを検討するため、調査協力者の語りからみられた体験の比較検討による質的な分析を行った。今回は、9名という少数の協力者に共通して見られた体験を示すことになったが、分析の妥当性を高めていくには、先述のように、さらに協力者数を増やし、共通して見られる体験を指標化して、第三者による評定を試みるなど分析方法には改善の余地があるだろう。

〔引用文献〕

- 千葉元（1982）：芸術療法（造型療法）の手引きとその経験，徳田良仁・式場聰（編）143-182，牧野出版
- ディディエ・アンジュー（1985）：皮膚・自我，福田素子（訳），言叢社
- ガストン・バシュラール（1972）：大地と意志の夢想，及川馥（訳），思潮社
- 平井久世（2010）：粘土製作における「触れる」ことについての一考察，京都大学大学院教育学研究科紀要，第56号，279-291
- 河合隼雄（編）（1969）：箱庭療法入門，誠信書房
- 小柳恭治（1978）：触覚の世界・心身のはたらきとその障害シリーズ3，光生館
- 中井久夫（1973）：中井久夫著作集 精神医学の経験 1巻 分裂病，83-114，岩崎学術出版社
- 中井久夫（1976）：「“芸術療法”の有益性と要注意点」芸術療法，7号，55-61.
- 中道泰子（2010）：箱庭療法の深層・内的交流に迫る，創元社
- 小野京子（2005）：表現アートセラピー入門，誠信書房
- 島田佳枝（2011）：幼児の粘土造形の研究方法をめぐって・関係論的観点の意義と可能性について，埼玉学園大学紀要（人間学部篇），第11号，235-242
- 高橋優佳（2010）：造型表現の心理臨床的意義：青年期における個別粘土製作を通じて，京都大学大学院教育学研究科紀要，56，153-165
- 徳田良仁（1998）：芸術療法1 理論編，徳田良仁・飯森眞喜雄・中井久夫・山中康裕（監修），11-27，岩崎学術出版社
- 山口登代子（1997）：箱庭療法における砂と母性，性格心理学研究，第5巻，第1号，58-60
- 山脇眞弓（2012）：教師の主観的気分に及ぼす粘土による表現活動の効果，名古屋柳城短期大学研究紀要，第34号，139-148
- 山脇眞弓（2013）：粘土による心理的效果について，名古屋柳城短期大学研究紀要 第35号，135-148
- 吉水はるな（2007）：砂のみの箱庭表現についての一考察，岡田康伸・皆藤章・田中康裕（編）26-36，創元社

〔付記〕

本研究は「人を対象とする研究」倫理審査委員会による審査を受け、承認を得たものである（承認番号H26-32）。

（かわもと さとる 教育学研究科臨床心理学専攻修士課程修了）

（指導教員：石原 宏准教授）

2015年9月30日受理